梅津新聞

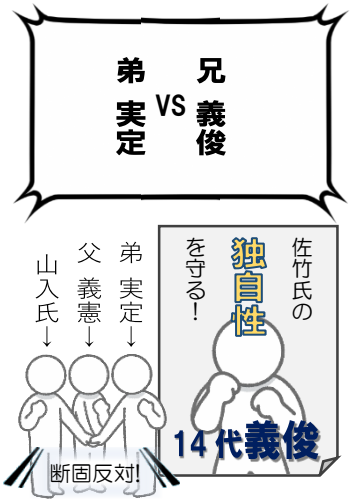
（中世編⑤）

2020年
6月18日木曜日

常陸太田市郷土資料館
（西二町 2186）
TEL:0294-72-3201

くわしくふりかえる佐竹氏の470年間（4）

長きにわたる戦い「山入の乱」②



佐竹氏の内部では、13代義憲の跡を継いだ嫡子※1義俊と、憲実の養子となっていた義俊の弟実定とが対立していました。義俊は父や父方の実家上杉管領家からの圧力に反発し、佐竹氏の独自性を維持しようと鎌倉公方に近づいていきました。兄義俊の考えに同意できない実定は、父義憲と山入氏の支援をとりつけ、常陸国の豪族を動かす手はずを整えて享徳元年（1452）、義俊に佐竹当主の座を要求しました。これに対抗できないとみた義俊は太田城を出て孫根城（旧桂村・現城里町）に逃げ、それから14年間、実定は兄義俊に替わって太田城を拠点とすることになりました。その間実定は、さまざまな戦において功績を残し、幕府より信頼される有力武将として関東で活躍しましたが、寛正6年（1465）9月、突然病死してしまいました。隠居の身であった義憲は、次の当主として実定の子義実を置こうとしましたが、豪族たちの反対を受け実現しませんでした。そして、義俊は弟の死をきっかけに太田城に帰ることになりました。

※1 嫡子…正室から最初に生まれた子どものこと。

山入祐義の嫡子義知は、佐竹氏に反発し、文明3年（1471）頃から佐竹氏14代義俊・義治父子と各地で衝突を繰り返していました。対して佐竹氏は、豪族を統率できるだけの権力が確立されておらず、領地を譲る代わりに軍事的援助を受けるという状況でした。

文明9年（1477）、義俊が亡くなり義治が15代当主となるや、山入義知は久米城（旧金砂郷村・現常陸太田市）を襲撃しました。文明10年にこれを奪って太田城総攻撃の拠点としますが、義治はなんとか久米城を奪い返し、義知を破ることができました。

延徳2年（1490）に義治がこの世を去り、その子義舜が幼少であとを継ぐと、山入義藤・氏義父子と、天神林氏や宇留野氏といった佐竹一族、および江戸氏らが太田城に攻撃をしかけます。義舜はこれに応戦することができず孫根城に逃げ延び、太田城は山入義藤らに奪われてしまいました。しかしその2年後に義藤が病死したことで、まわりの豪族たちは義舜の味方となり、山入氏が急速に孤立化していきます。

明応9年（1500）、山入氏義は孫根城に逃げていた義舜を攻め、東金砂山（旧水府村・現常陸太田市）に敗走させました。しかし義舜が本陣を構えた東金砂山山頂は地形が険しく攻めにくく、山入軍は苦戦を重ねます。しかも戦いの最中、突然激しい風雨と落雷が襲い、義舜軍はこの混乱に乗じて山入軍を一気に攻めて破りました。

勝利をおさめた義舜は、太田城の山入氏義を攻めます。氏義は一度はこれを逃れますが捕えられ、茂木で子の義盛とともに殺されてしまいました。

こうして山入氏は滅亡し、100年続いた「山入の乱」は終結しました。そして太田城に入った佐竹義舜は、いよいよ戦国大名として領国の統一事業に乗り出すことになるのでした。